

0. Naharin 作品『Sadeh 21』を「読む」上での複数の視点

福本まあや（お茶の水女子大学）・近藤いちご

1. 問題意識と研究目的

本研究の問題意識には、振付家らの舞踊芸術上の関心や試みを、その作品から読み取り示すにはどうしたら良いかという問いがある。Adshead-Lansdale は、舞踊作品をテキストとして捉え解釈することの意義を著書『Dance Analysis』（1988）で述べ、その後、間テキスト性の概念を踏まえた著書『Dancing Texts』（1999）等を発表している。ここでいう間テキスト性とは、テキストとは他のテキストとの関係性の中で意味生成が起きる性質を説明する語である（Kristeva 1966）。

本研究では Adshead-Lansdale の論に依拠して、イスラエルの振付家 Naharin の代表作の一つ『Sadeh21』（2011）を分析し、同作品の構成要素と解釈可能性の関係の一端を示すことを目的とする。作品分析には市販 Blu-ray（Batsheva-The Young Ensemble, 2019, 76min）を使用した。

2. 間テキスト性を踏まえた舞踊分析理論

Adshead-Lansdale は、『Dance Analysis』への批判に対して「解釈は権威的な立場に渡され得るものではない」と反論しつつも、解釈に必要となる動きの区切れを誰もが「発見できるとみなすことは、ナイーブかもしれない」（1994）としていた。続く『Dancing Texts』では「解釈は論理的に経験を必要とする」としたうえで、Eco（1979）の論等を引用しながら、作品は鑑賞によって完成することや、唯一ではないが妥当な解釈があるとする。また作品描写で避けがたく生じる偏りを、否定的に捉えて記号論的な閉塞状況に陥るよりは「未解決のままにしておくので良い」としている。

3. 振付家 Naharin の作品観、観客観と作品評

Naharin の作品観を示す本人の言説には「ダンスで最も発信したいことは、挑発」「私が語ろうと

しているのは構成」「物語を始めたら、それを終わらせる必要は無い」等が注目される。彼の観客観が見られる言説としては「私の作ったものは、[見る人の] 思いや感覚、記憶と出会うところで結合と構成をなす」「見る人の想像力による」等、彼は作品の間テキスト的な特性について認識していると捉えられる。また「我々 [人] のそんな [記憶と結びつける認識の] 習性に疑問を投げかけ、それを面白がり、(…)あるいは封印してほしい」「観客は様々なメッセージを受け取り、複合的な経験することになる」等が確認される。

研究者 Aldor（2003）は彼の作品に繰り返し見られるテーマや要素として「“他者性”と集団との並置；展望と視点の転換 (…);ある種のストーリーラインの発展」と指摘し、「Naharin の世界の両極性は、(…)見えていることと見えないことの間にある」と指摘している。各国の『Sadeh21』評には「抽象的」「想像力を刺激する」「重い現実」に直面せざるをえなくなる」「意識的な理解を迂回する感情的な共鳴がある」等の幅が見られる。これらを踏まえて複数の視点から作品分析を進めた。

4. ナハリン作品『Sadeh21』の解釈可能性

舞台後方全面に架設された白い壁に「Sadeh1」「Sadeh 2」と順番に字幕が映し出され作品は進む。この字幕は作品に含まれる動きの構成上の決まり事や語りの流れを区切り、整理する役割を担うように見える。特徴的な動きは、伝達不全、集団の形成と崩壊、虐待、疎外など「重い現実」のイメージとつながるが、最後の壁面後方の空間へ繰り返される転落または投身の動きのモードの微妙な変化によって、それまでに進めていたイメージの次元での読みは混乱し、異なる次元での解釈可能性への気づきが生まれる。

『Sadeh21』には様々な文脈における身体の動きを並列させコラージュ的な効果を誘いつつ、読みを裏切る構成を通して観客の認識を混乱させ、彼が意図する問いかけに対する内省に観客を導くと考察される。